月輝迷走中

明紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月輝迷走中

【Ｎコード】
Ｎ９３１０Ｇ

【作者名】
明紅

【あらすじ】
異世界で起きたこの男。えぇ～巻き込まれちゃったの！？どうなっていくのやら。～この小説見切り発進で進むため不定期掲載です。なるべく早く頑張ります。～

大樹の樹の下で（前書き）

初めまして。初めての小説です。明紅です。頑張りますのでよろしくお願いします。

大樹の樹の下で

・・き・・・げっき・・・月輝！！

はっ！

ここは・・・なぜ森で寝てる？

状況がわからない・・・

「やっと起きたのねぇ～月輝。」

周りを見ても何もいない。

何だこの声は。

「目の前にいるでしょうが！よく目をこらして見てごらん！」

じーっ。

何かぼんやりと人の姿が見える。何だこれは。幽霊か？

「幽霊なんかじゃないわよ。私は精霊！あなたをこの世界に連れてきたのよ。」

精霊？この世界！？何だ？わからない。頭が痛い・・・

「わからないの？元の世界と違うのも私の事も？ひどいわシクシク・・・」

何を言ってるんだこの幽霊。それに俺はこの幽霊を知っている？第一に俺は何だ？名前がわからん。

「この世界に連れてくる時に記憶がなくなってる？名前わからない

？家族は？魔法は？体術は？」

何を言ってるんだこいつ。って！なぜ思考が読めるんだ！？

「私がすごいからに決まってるじゃん。そんなの朝飯前よ。てか私がわからないの？最初から説明しないといけないのねシクシク・・・」

何言ってんのこいつ・・・

「私の名前はガイア。精霊なの。あなたの名前は桜　月輝よ。記憶はだんだん思い出すからいいでしょうけど、私がこの世界に移動する時に巻き込まれちゃったのよ。それで何の間違いかわからないけどその時に記憶を置いてきちゃったのね。それで今は森の中心のあなたが寄っかかってた大樹の下にまる2日間寝てたのよ。まぁ～ざっとこんな説明だけどわかった？」

何か話がよくわからんがまぁわかったよ。

俺は桜　月輝という名前でそれ以外は今はわからないと。記憶は戻るのか？

「月輝の記憶は戻るかわからないわ。何かの拍子で戻るかもしれないし戻らないかもしれない。そしたら私が責任もってお世話するか

ら安心して。」

戻らないかもしれないのか。まぁ些細な事だ。何にもわからないけど生きていける。

「何か楽観的ねぇ～。まぁいいわ。お腹空いてるでしょ？まる2日間寝てたもんね。悪いけど私は契約してないから物質に触れないのよ。てか干渉？まぁとりあえず移動しながら探さない？」

そういえばお腹空いてる。でもその前に聞きたい事がある。

「なにー？何でも答えちゃうわよ♪スリーサイズでも（笑）」

あなたは女性か？声や口調が女性のものだが姿がはっきり見えないからわからないんだ。

「私は女よ！失礼ね！あっ姿がはっきり見えない？あなたには見える素質があるのに？ちょっと待ってて。開眼させるから。」

と彼女は人差し指を俺の額に当てると・・・

「見える！ガイアが見えるぞ！」

そこにはナイスバディを通り過ぎてセクシーすぎる肉体を持つ美女がいる。

「当たり前じゃなーい。今あなたの目に魔力を通したの。そういえば魔力を通してみてわかったけどあなたって魔力がすごくたくさんあるのね。小さい頃と桁違い。下手したらアン以上よ。」

アン？誰だその人？

「忘れちゃってるならしょうがないわね。あなたの祖母。おばあさんよ。私は彼女と契約していたの。彼女の魔力量は底無しだったわ。お母さんも同じ。お母さんとは契約しなかったけどね。あなたも同じかそれ以上の魔力量があるわ。」

そうなのか・・・って魔力ってことは魔法があるのか。

「まぁ魔法はおいおい教えてくわ。覚えてないでしょうし。」

俺は魔法を知っていたのか。ふむふむ。俺に関する情報を得たぞ。

さぁそろそろ食事しに行くか。ここがどこだがわからんしな。

「とりあえずあっちに人の気配がするわ。行ってみましょう。」

そうするか。何かこの世界に関する情報でも得よう。

そして・・・食事・・・

「全ては月輝が記憶を取り戻してからね。期待してるわよ。契約の相手なんだから。私の旦那(ハート)様」

～幸か不幸かその声は聞こえなかった～

大樹の樹の下で（後書き）

なお携帯で書き込んでるためちょっと文字数少ないかも・・・

塵も積もれば山となるをモットーに頑張ります。

リナ・バリアス（前書き）

話が一向に進みません。

リナ・バリアス

さっきはずっと座っていたから気づかなかったけど、結構体が軽い。二日間何も食べていなかったのが嘘のようだ。それにしても随分歩いたような気がするがいつ人に会えるのだ？あっ！何か通り道のようなのがある。ここを歩いていけば人に会えるのかな。聞いてみよう。

「なぁガイア。この真っ直ぐ続いているのは道か？ここ歩いていけば人に会えるかなぁ。」

「そうね。道だわ。人の気配もこの道の向こうからするし何かこっちに近づいているみたいだから待っていたら来ると思うわよ。疲れてるんでしょ？」

「それが全然疲れてないよ。むしろ力がみなぎっている感じ。この世界についてから体がおかしいよ。」

「そうね、周囲の魔力があなたに取り込まれているみたい。力がみなぎるように感じるのはそのせいじゃないかしら。あらそろそろ来るわよ。」

「まぁいい事ならいっか。そろそろ人影が見えてきた。」

人影が見えてきたのはいいが、何かたくさんいるぞ。馬に乗っているみたいで列になっているから後ろが見えない。おっ向こうも気づいたみたいだ。手でも振るか。何か話しているみたいだ。

「何かもめているみたいね。私達があやしく見えるのかしら。」

「まぁ確かにはたから見たらあやしいもんだよな。てか言葉は通じるのか！？コミュニケーションができないと説明もつらいな。」

「言葉は一緒だから大丈夫と言いたい所だけど、違うのよね。ちょっと待ってて。」

と何やらぶつぶつつぶやきだしたぞ。

「ふぅ～これで言葉が通じるようになったから大丈夫よ。ちなみに言葉は世界共通だからこの先言葉の違いに悩まされることはないわ。」

何か魔法って何でもありなんだな。まぁ言葉が通じるならいいや。

向こうから一人馬に乗った状態で来る。近づいてみて初めてわかったのはその人は女性らしい体つきをしていること。あとこっちに向かって怪訝そうな顔をしていること。

「何でこんなところに人がいる？ここは王家直轄の土地なのは知っているか？それにお前は誰だ？見かけない顔だな。」

「あのー・・・「馬に乗ったまま話す人には何も言うことはないわ。」

「おい！ガイア何言って「ちょっと月輝は黙ってて！！」　「はい！！」

「精霊？これは失礼した。」と言って馬を降りる。

「私はノーチェ国近衛騎士団副団長のリナ・バリアスだ。お前は誰だ？なぜここにいる？」

「（騎士かぁ～何か固そうな人だなぁ。）僕は桜　月輝といいます。ここが王家直轄とは知りませんでした。すいません。」

「私はガイア。見ての通り精霊よ。あなたはノーチェ国近衛騎士団なのね？なら話は早いわ。国王は何て名前なの？私の知っている国王はブルクって名前だけど。」

「ブルク様は先代だ。今はその息子であるブアル様が国王だ。」

「ブアル！？あの生意気なのが国王なの？想像がつかないわ。」

「精霊であろうと国王に失礼は許さない！！それでその精霊が国王に何の用だ？見たところ何の属性かわからないが。なぜブルク様やブアル様とお知り合いなのだ？」

「精霊精霊うるさいわ。ガイアという名前があるのだからそう呼んで頂戴な。用もないけどこの子の顔を見せるだけよ。あなたはブルクの時代に助言する立場にいたエルフをご存知？？」

「聞いたことがある。ブルク様の幼なじみであり、助言役にいたが突然いなくなったと。そのエルフが何なのだ？」

「私そのエルフと契約していたの。だからブルクもブアルも知り合いなのよ。わかった？」

ガイアってすごい人と知り合いなんだなぁ。てか契約してたって俺の祖母!?エルフ!?人じゃないのか。

「月輝にはまだ言ってなかったわね。覚えてないってややこしいわ。」

「さっきから黙っているこの男は何なのだ?その助言役だったエルフが関係するのか?」

「月輝はその孫よ。詳しいことはブアルに会ってから説明するわ。とりあえずあちらにいる王女に説明して連れて行ってくれない?」

「わかった。とりあえず待っていてくれ。説明してくる。」

リナが行った後俺はガイアに言った。

「ガイア・・・お腹空いた・・・」

「あっごっめ~ん!!もう少し待っててね。」

リナ・バリアス（後書き）

いつまで空腹のままなのかわかりません。

アルハ・B・ノーチェ（前書き）

新キャラです。

アルハ・B・ノーチェ

向こうで長くリナが話している。その間俺はガイアと話していた。

「なぁガイア。俺の祖母ってこっちの世界の人だったんだな。」

「そうね。月輝は知らなかったわね。確かアンもミラも話していなかったはず。ミラはあなたの母親よ。何せあなたのお父さん、つまり風貴にも話さなかったから。」

「俺の母親もこっちの世界の人だったのか！？どうやって知り合ったんだ？」

「そうよ。月輝がこっちに来たのと同じように空間の歪みが出てきてね、それがなくなると同時に爆発に似たようなのが出てそれに巻き込まれたの。風貴、あなたのお父さんとはあっちの世界で最初に出会った人間が風貴よ。その後は色々あったんだけど結局くっついて月輝が生まれたってこと。」

「何か色々あったんだな。じゃあ母親もエルフなのか？俺はエルフと人間のハーフになるのか。」

「その通り！！座布団一枚あげちゃうわ！」

ハーフか。その割には耳がとんがってないし体つきもそんなに変わりはないな。

「なぁ俺はハーフなんだろ？人とエルフと何が違うんだ？」

「それははっきりとはわからないけど、月輝の事は多少はわかるわ。まぁ最初に説明なんだけどね、魔法って人間の使うものとエルフの使うものって違うのよ。自然の中にマナってものがあるの。あっちの世界でいうと原子に似たような存在ね。まったく違うけど。エルフの魔法は自然の中のマナをそのまま使うことができるの。集中しないといけないから慣れないものは疲れるけどね。小さい頃からマナを使った生活をするから魔法に関してはどの種族にも引けをとらないの。まぁ体力はないけどね。人間はマナを使うことはできないのだけど、一度体に吸収してその体に溜まっているマナを使うの。マナは呼吸や食事で補給できるわ。体の一部であるマナを使うからすぐ疲れちゃうわね。で、そこで月輝の事なんだけど、月輝は両方ともいいとこ取りしているのよね。エルフみたいにマナも使えるし、人間みたいに体にもマナがたまっている。むしろ人間の何倍もマナが溜められるわ。人間の中でも最強の中に入るだろうしエルフの中でも強いと思うわ。なんせあなたは生まれてからずっと魔法の修行してきていたんだからね。」

「へぇ～魔法ってすごいのな。って俺って魔法使えたのか！？」

「当然じゃない。当時最強のエルフのアンの孫よ。ミラは戦いが好きじゃなかったみたいだけどね。もちろん月輝が教わった魔法はエルフの魔法だから人間の使う魔法は使えないわよ。」

そうだったのか。俺ってどんな化け物だよ・・・

よく考えてみると俺はあとは人間用の魔法を覚えていけばいいんだな。そうしたら魔法は完璧になるのかな。エルフの魔法は記憶が戻らない場合に覚えていけばいいかな。

どうなる俺！？

ガイアと話しているとリナが一人連れて戻ってきた。

「待たせたな。この方はノーチェ国第一王女のアルハ様だ。」

そこにはまさに絵に描いたような美少女が立っていた。じーっと凝視してみる。金髪に茶色の瞳に程よく出るとこは出ていてちゃんと細いとこは細い。

ポカーン！！「どこ見ているの！？見るならここに美女がいるでしょ！？」

そうだった！！叩かれた頭をさすりながらガイアを見る。水色の髪に金色の瞳格好は薄い布でできた足まであるワンピース！？それって透けるはずだが肝心な所は何も見えないというかぼけて見える。ガイアは出るとこが相当出ていてそれでいて細い。胸のおかげで全身がむっちりしていてなんとも扇情的だ。

とガイアをまじまじ見ているとアルハが話しかけたそうで代わりにリナが

「なぁそろそろいいか？」

「はい・・・」「仕方ないわね。」

「初めまして。アルハと申します。お爺様とお父様のお知り合いだそうで。申し訳ありませんが何か証拠になるものとかお持ちでないでしょうか。今何かと物騒なので証拠でもないと信用できません。」

「なぁガイア。俺は何も持ってないけどガイアは持ってるか？」

「持ってるわけないじゃない。とりあえず私が覚えている二人の姿を見せるわ。」

とガイアがつぶやくと何もない空間に半透明の親子が現れた。片方は４０代後半ぐらい、もう片方は１０代後半ぐらいの姿だ。

「今の私たちには証拠は持ってないの。契約していたアンはブルクから腕輪が贈られていたわ。私にできることは当時のブルクとブアルの姿を映すぐらいだわ。ねぇどうかしら？」

「この人たちは！絵画が保存してあるお部屋で見たことあるわ！！確かにお爺様とお父様だわ。お爺様・・・」

よくわからんがアルハが泣き出してしまった。リナに聞いてみると、

「アルハ様は大変なおじいちゃん子でそれはもうブルク様のお部屋へいつも遊びに行っていた程だ。今はもう亡くなっているが亡くなった当時はそれはひどく泣いておられた。ブルク様のことを思い出していたのだろう。」

そうだったのか。泣いているアルハを見ていると何もしていないが悪い気持ちになってくる。

「ブルクはもう亡くなっていたのね。孫もできて幸せに生きることができてよかったわ。」

少しアルハを待つか。

「すいません。取り乱してしまって。あなたがガイアさんね。あなたのことはお爺様とお父様から少し話を聞いていました。あなたが戻ってきた時にはよくしろとおっしゃってました。ガイアさんはともかくこちらの男性はお爺様の助言役のエルフの方の孫と聞いたのですが説明お願いできないかしら。」

「せっかくだけど詳しいことは説明してもわからないと思うわ。それに説明するには私とアンとミラが突然いなくなった事も説明しないといけなくなるから。まぁざっと言えばこの子は桜　月輝って名前でアンの孫よ。月輝は記憶喪失なの。自分のことがわからないから無理に質問はしないであげて。」

「桜　月輝といいます。とりあえず記憶がないのでなんとも言えないのですが、アルハさん、リナさんとりあえずよろしくお願いします。」

「「よろしく（お願いします。）」」

とりあえず知り合いはできた。不安要素はたくさんあるがまぁ生きていける。てか早く移動したい。

ぐぅぅ〜〜〜

あっ・・・

「月輝は二日間何も食べていないからとりあえず移動しない??」

「その方がよさそうだな。ささアルハ様戻りましょう。」

「はい。クスクス・・・」

やっと移動だ・・・早く食事をしたいものだ。

アルハ・B・ノーチェ（後書き）

のんびりと書きますのでそこのところご容赦ください・・・

リンダ村にて1

初めての屈辱なのか??　馬に乗ったこともない俺には馬に乗れるはずもなく、馬も余っていないため、馬に乗ったリナの後ろに掴まっている。始めの方は変な所に触って馬から落とされそうになっていたが、今は何となく腰に掴まっている。

「なぁリナ。今ってどこに向かって走っているんだ?」

「この道はさっき言ったとおりで王家直轄となっていて、この道を行くと村に出る。」

「何で村に向かっているんだ?」

「それはお前がお腹が空いたと言ったからだろうが!?普通だったら城に引き返すところだが、アルハ様がお前の事を考えて城より近い村に行くことになったのだ。」

そうなのかぁ。悪いことしたなぁ。まぁご飯にありつけるからいいかな。それにしてもリナって細いのな。役得役得っいてーーー!!?

「月輝が変なこと考えてるからよ。」

ガイアめ。ちなみにガイアは浮いている。

〜〜

「ここはリンダ村というのだ。私たちはこれから宿屋に行きその後にご飯を食べに行くぞ。」

「他の人達はどうしたの？今リナさんとアルハさんとガイアしかいないけど。」

「アルハでかまいませんわ。他の人は返しましたわ。最近この付近に賊が出回っているみたいなので。普段は私とリナの二人だけです。本当は最初からリナがいれば他の人はいらないんですけど。」

「リナでかまわん。私の部下達だがブアル様にお前とガイアの報告も任せている。賊は一応経験を積むためだ。」

「早くご飯食べないと月輝倒れちゃうよ〜？？」

「うむ。わかった。アルハ様行きましょう。」

〜〜

宿屋に行き外に出る。これからご飯だ。

「どこでご飯を食べるの？？」

「酒場ですわ。昼間でも食事を出しているところなんてこの村では酒場ぐらいなので。」

「もしかして酒でも飲める？？」

「ガイアは肉体ないから無理だろう??」

「ざーんねーん!!かわりに月輝飲んでね!!」

「はいはい。」

と歩いていると噴水のある広場に出た。噴水の水で遊んでいる子供がいる。兄と妹のようだが兄が妹をたしなめているようだ。

痛ぅぅ。

「月輝どうしたの?大丈夫??」

「ちょっと頭痛がしただけで大丈夫だよ。何か思い出したような気がしたんだけど。」

「いい傾向ね。後で治してあげるから早く酒場に行きましょう。」

「月輝様着きましたわ。」

ここか。ガイアの言っていた治すのを早くしてほしい。頭が割れそうに痛い・・・

から〜ん

「いらっしゃいませ。姫様!?どうぞこちらに。」

「マスターさん。またお世話になります。」

知り合いだったのか。慣れているみたいに村を歩くもんだから結構きているのかな。

「ご注文は何にしますか？」

「この男に食べさせるからいつもより多めに作ってきてくれ。」

「かしこまりました。」

「アルハとリナは結構この村に来ているのか？？」

「そうです。ノーチェ国の王家の者はしたきりがあって国王や嫁ぐ前に必ず国中の街や村に行ってそこに住んでいる人の話を聞いてくるのです。」

「そこで使える人材がいたらスカウトして、またその地を収めている者が悪政をしていたら取り締まったりして回るのだ。」

何か大変なのね王族の人って。俺の祖母は王家に仕えていたのか。そういえばガイアがさっき何か言ってたな。

「お待たせしました。」

マスターが料理を持ってきた。食べてからでいいかな。

「すいません。いただきます。」

なぜか俺がいた世界でいうステーキだった。

〜〜

食べ終わって幸せな気分になっていると外から不隠な気配がしてきていた。

「ガイア。」

「わかってるわ。」

男が１０人入ってきた。向こうに座った。

「アルハ様。そろそろ出ましょうか。」

「仕方ないですね。月輝さん行きましょうか？」

「あっはい。ガイア後で治してくれ。」

「わかったわ。」

リナが支払いを終えて出て行こうとするとさっき入ってきた男達の中の２・３人が近づいてきて声をかけてきた。

「ねーちゃん。ちょっと付き合わ「お断りします。」

「連れないこと言うなよ。せっかく誘ってやってんだから付き合いな。」

と男の一人がアルハの肩を抱き寄せてきた。

「このお方に触るな！」

「おっと～いきなり近づくなよ。この女がノーチェ国第一王女のアルハ・B・ノーチェだというのはわかってるんだぞ。」

せっかく人が満腹で幸せな気分に浸っていたのに。

「何だおまえっグハっ「うるさい。アルハに汚い手で触るな。臭い息を吐くな。この場にいることに対してすごく嫌悪感がある。さっさと去れ。いやむしろ死ね。」

言ったすぐ後に別の男が殴りかかってきたのでアルハをリナの方へ押しのけ、殴ってきたのを避けながら後ろに回り首筋に手刀を落とす。

「ヒデフッ」

その後は頭が響いて意識を落としてしまっていたので何があったかガイアに教えてもらうまでわからなかった・・・

～～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9310g/

月輝迷走中

2010年10月27日23時21分発行